地方分権体制はなぜ強靱なのか

正論

拓殖大学顧問
渡辺　利夫

日中の近代化はどこで分岐したのか。本欄で2回ほど論じてきたが、論点がもう1つある。

多様性育んだ「幕藩体制」

日本が世界史に登場したのは、幕末の混乱期をくぐり抜け、列強に門戸を開く一方、中央集権的な国家体制の形成に成功した明治維新によってであった。江戸時代の日本は高度に成熟した封建制度を擁し、この制度にもとづいて二百数十の藩が割拠し、各藩主により全国が分割統治されていた。徳川家が最も強力な存在であり、中央政府が徳川「幕府」として君臨し、地方政府は各藩による統治に委ねられた。この政治システムが徳川「幕藩体制」と呼ばれるゆえんである。

各藩はそれぞれ独自の習慣、学問、祭礼はもとより、固有の産業政策をもって地方物産の振興にも努めた。全国にまたがる幕藩体制の著しい多様性こそが、江戸時代日本の封建制を彩る重要な特徴であった。

明治維新が成功したのは、権力を中央に一元的に集中させてきた中国や朝鮮のような専制的な王朝国家とは対照的に、日本が権力の多元的分散を特徴とする封建制度を広範に採用していたが故である。封建制は旧体制（アンシャンレジーム）が衰退し劣化し機能不全に陥ったときに、これに代わる新体制を運営する能力をもつ人間集団を各藩の中に育んできたのである。

対照的に、中国を特徴づけてきたのは封建制ではなく、郡県制であった。全土をいくつもの郡、県に分け、郡、県を中央の直下においてその統治は中央から地方に派遣された官僚によって一元的になされるという、皇帝を頂点とする古代的な官僚政治体制が一貫して踏襲されてきた。郡県制は封建制とは対照的に、中央集権的で専制的な統治機構に他ならない。日本が封建制、中国、朝鮮が郡県制を政治統治機構としてきたことが、両者の近代化の成否を分かつ要因であった。

日中近代化の成否占う要点

地方各藩の徳川幕府からの自立性は相当に強いものであった。西南雄藩において、その傾向は著しかった。薩摩藩は島津斉彬が藩主となるや、日本初の洋式艦「昇平丸」、蒸気船「雲行丸」などの造船事業、反射炉や溶鉱炉などの製鉄事業に精出し、維新後明治の殖産興業・富国強兵の原型を薩摩の地において展開した。長州藩では大村益次郎が中心となって軍事体制を整え、佐賀藩では鍋島閑叟（かんそう）により反射炉や蒸気船「凌風丸」が建造された。

西南雄藩を中心に日本の各藩でそれぞれ分散的に拡充されてきた軍事力が、倒幕の一点に凝集したときのエネルギーには巨大なものがあった。封建制の強靱性は実にその多様性にある。

「西洋の衝撃」を受けて中央権力たるアンシャンレジームが動揺して事態収束能力を喪失したとき、これに代わる新たな中央権力を樹立し運営する能力をもつ「代替者」が出現するか否かが、近代化の成否を占うポイントだと私はみる。

日本では、源頼朝の時代に始まり江戸時代において成熟をみせた封建制度のもとで、この代替者が育成されてきた。封建制度を特徴づけるものは、地方分散型の権力構造である。とりわけいくつかの雄藩は政治、経済、教育、文化、軍事力において秀で、単独では中央政権を覆す力はないものの連合すれば、アンシャンレジームの代替者となることは十分に可能であった。

次代を開く人間集団供給

明治維新とは、薩長を中心とする西南雄藩が古代に淵源をもつ天皇を最高権威のシンボルとしてアンシャンレジームに挑戦、これを転覆して文明開化と呼ばれる近代化に向けてそのエネルギーのすべてを噴出させた革命であった。

これと対照的に、中国の近代化は容易に進むことはなかった。中国は古代的で専制的な王朝の伝統を引き継いで皇帝や主という絶対的権力者を戴き、これを官僚政治家が十重二十重に取り巻いて、「郡県制」と称される極度に中央集権的な政治システムに全土の末端までを組み込んできた。「権力資源」はすべて中央に集中し、地方には次代を担う代替者が育つ空間はほとんど存在しなかった。中央集権的な王朝国家システム、これを支えるイデオロギーの呪縛が「西洋の衝撃」を開明的に受けることを阻んだのである。王朝国家の重い、実に重たい伝統の重石（おもし）からみずからを解き放つことは不可能であった。

アンシャンレジームがアンシャンであるがゆえに劣化し衰退していくときに、これを廃して新たな正統的レジームをつくる代替者を、その国の伝統が用意していたか否か、これがポイントである。日本には代替者が確かに存在したが、中国にはこれが現れなかったのである。

中央集権か地方分権か、古くて新しいテーマだが、どちらが次代を開く人間集団をより豊かに供給するのか、問われるべき課題はここにある。

（わたなべ　としお）

2024.9.2

本記事のweb版はこちら